

最後の運動会

倉敷市立長尾小学校

六年生 福井 颯太

今日は、小学校最後の運動会。晴天にめぐまれ、リレー、応援、組体操と順調に進んで閉会式でぼくが閉会のあいさつをして・・・といくはずだったのに、なぜかぼくは今布団の中にいる。

運動会前日の帰りの会、なんか体がおかしい。熱を測ると38・6度。なんで今？頭の中で信じたくない気持ちとお母さんの悲しむ顔がすぐに頭をよぎった。帰り際、先生に、「熱が下がったら何があっても明日は必ず来いよ。」

と肩をたたかれた。もちろんぼくもそうしたいと思っっているが、明日のことは考えられないほど頭がくらくらしていた。

その日は病院に行って、とにかく寝た。39度まで上がり、も

う寒気と体の痛みで動くことができなかった。朝起きたら熱が下がってよくなっていると思ったが、実際は、さらに熱が上がっていた。布団から起き上がることができず、午前のリレーは行くことができなかった。ぼくの頭の中は、午後からの組体操のことがぐるぐる行ったりきたりしている。なんでぼくだけこんなことになったんだ。お願いだから、熱よ下がってくれ。そう思いながらひたすら横になっていた。

お昼頃になって、お母さんがぼくのところに来て言った。

「颯太、先生に午後の部に参加できるかどうか返事する時間になった。熱もあるし、布団から起き上がれない今の颯太を見て、お母さんはあなたの体が心配だし、行くのはあきらめよう。」

そう話すお母さんの声はふるえていた。友達顔や今まで練習をがんばってきたときのことや、先生のきびしい声を何度も思い出した。ぼくは、お母さんの手をつかんで声をしぼりだした。「お母さん、みんな待ってる。組体操だけはどうしてもどうしても行きたいんだ。行かせてよ。」

お母さんは、ぼくをぎゅうと抱きしめて泣きながら、

「わかった。行こう。最後の運動会だもんね。」

お母さんに抱き起こされてやっと立ち上がり、着替えて車に乗った。運転している父が、

「颯太、がんばってこいよ。気合で乗りきれ。友達が待っているぞ。」

お父さんに言われたその言葉でやる気が出てきた。

学校に着いたらすぐ先生が、

「よく来たね。」

と声をかけてくれた。組体操ぎりぎりまでぼくは保健室で寝ていた。

いよいよ組体操の出番がきた。みんなが並んでいる入場門のところに、先生に手をひかれながら行くとき、こんなぼくをみんなはどう思っているだろうと心配だった。でも友達は、

「颯太、大丈夫か。」

「さすが、颯太。よく来たな。」

「ぼくたちが必ず支えるから何かあったら言えよ。」

友達からの温かい言葉に胸が熱くなった。自分の位置に座ると、何だか体にエネルギーが込み上げてきた。いつもの練習のときのように、すっと体が動くような気がした。

音楽が鳴り出した。組体操をしているときのことは覚えてい

ない。無我夢中だった。最後までどうにか乗り切ることができた。

気が付いたらぼくは保健室のベッドに寝ていた。今回の組体操のテーマ「限界突破」の文字が、全員のTシャツの後ろに書かれていた。ぼくは、このとき完全に限界を突破していた。

家に帰って組体操のビデオを見た。そこには仲間と共に練習通り動いているぼくの姿と、お母さんのすすり泣く声が入っていた。組体操を無事に最後までやり抜けたのは、やはり仲間がそばにいてくれたからだと思った。友達や先生、家族にありがとうの気持ちでいっぱいになった。ぼくにとって忘れられない小学校生活最後の運動会になった。